興膳　宏
Kozen Hiroshi

杜甫のユーモア
ずっこけ孔子

岩波書店

杜甫のユーモア
えっこけ孔子

興膳　宏
Kōzen Hiroshi

岩波書店

興膳 宏

1936年福岡県生まれ．1966年，京都大学大学院博士課程修了．京都大学教授，京都国立博物館長を経て，現在，京都大学名誉教授．中国文学専攻．

編著書

『文鏡秘府論・文筆眼心抄』『異域の眼』(以上，筑摩書房)，『乱世を生きる詩人たち』『古典中国からの眺め』『中国古典と現代』(以上，研文出版)，『平成漢字語往来』(日本経済新聞出版社)，『新版 中国の文学理論』『中国文学理論の展開』(以上，清文堂出版)，『中国名文選』『杜甫――憂愁の詩人を超えて』『漢語日暦』『仏教漢語50話』，『杜甫詩注』(吉川幸次郎著，編，全10冊，既巻4冊，以上，岩波書店)ほか

杜甫のユーモア ずっこけ孔子

2014年3月26日　第1刷発行

著　者　興膳 宏（こうぜん ひろし）

発行者　岡本 厚

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・法令印刷　カバー・半七印刷　製本・牧製本

© Hiroshi Kozen 2014
ISBN 978-4-00-025960-6　Printed in Japan

R〈日本複製権センター委託出版物〉 本書を無断で複写複製(コピー)することは，著作権法上の例外を除き，禁じられています．本書をコピーされる場合は，事前に日本複製権センター(JRRC)の許諾を受けてください．
JRRC　Tel 03-3401-2382　http://www.jrrc.or.jp/　E-mail jrrc_info@jrrc.or.jp

杜甫のユーモア ずっこけ孔子

目　次

I

『荘子』の世界 …… 3
『荘子』の寓話／無何有の郷／車輪作りのコツ／荘周、夢に胡蝶となる／人間中心観からの解放

竹林の七賢 …… 12
竹林の七賢図／「七賢」の実像／日本人の「七賢」像

陶淵明の故郷 …… 18
陶淵明の故郷へ／陶淵明の墓碑／淵明酒／陶淵明もう一つの故郷／陶淵明の詩と真実

百歳のうた …… 27
百歳／百年歌／人生七十古来稀／八十余歳の詩人／長寿の秘訣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

家族を詠う詩人……37
妻を悼む詩／陶淵明の息子たち／李白の妻／愛妻家・杜甫／杜甫の子煩悩
井真成・阿倍仲麻呂・空海……47
井真成の墓誌／阿倍仲麻呂と王維／李白、仲麻呂を哭す／名文家・空海
歴史を詠う漢詩……55
頼山陽、歴史を詠う／本能寺の変／紫式部／仏郎王の歌
成島柳北の欧州紀行……63
『航西日乗』の世界／柳北、パリを散策／ナポレオン廟／フィレンツェに遊ぶ／イギリスへ
清末の詩人が見た日本……72
黄遵憲の『日本雑事詩』／西郷星／日本人の衣食／かな文字／日本人の娯楽
中国ダネの落語……82
落語になった中国古典／厩火事／抜け雀／二十四孝／風呂敷

戦後の漢詩日記……91
中国文学研究の先駆者・鈴木虎雄／終戦直後の世相／食糧難の嘆き／占領下の不快事

Ⅱ

杜甫生誕一三〇〇年に思う……103
杜甫のユーモア……106
杜甫の詩の連環性……133
中国古典と落語――天満天神繁昌亭の高座から……142
おとしばなし　孔子と盗跖（落語訳『荘子』盗跖篇）……151
孔子をののしる……164

Ⅲ

荷風という雅号……173

『山月記』の虎……179
「清」字の相性……183
清　暑……194
「読書」の変容……196
短縮語のいやしさ……198
鈴木虎雄先生没後五〇年記念会のこと……201
一海知義氏の陶淵明研究……208
四賢歓笑……212
今鷹真さんとの交友……213
初出一覧
あとがき……223

挿絵＝コウゼンアヤコ

[I]

『荘子』の世界

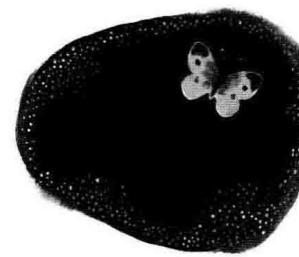
『荘子』の寓話

もし諸子百家の書で何が好きかと聞かれたら、ためらいなく『荘子』と答える。それはなぜか。人間社会の秩序は、各人が共有する常識によって保たれる。常識という知恵のおかげで、私たちは日々の生活を無事に過ごしている。だが、常識だけに依存するのは、人生を息苦しくさせ、また社会を閉塞させる。常識の埒外に飛びだそうとする志向があってこそ、進歩があり、飛躍がある。

『荘子』は、常識を逆なでする書である。決して非常識というのではない。常識を超越する思考がそこにあるということだ。

『荘子』最初の逍遥遊篇の冒頭は、その典型ともいえる例で、とてつもなく巨大な鳥の途方もなく雄大な飛翔のさまが描かれている。

「北の冥に魚有り、其の名を鯤と為す。鯤の大いさは其の幾千里なるかを知らざるなり。化して



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鳥と為るや、其の名を鵬と為す。鵬の背は其の幾千里なるかを知らざるなり」。

「冥」とは海のことだが、この字の原義は「暗い」ということ。中国古代文明の中心だった内陸地方の人にとって、海は未知の暗く不気味な空間だった。そこに棲息する「鯤」は、幾千里もの巨大な魚だというが、「鯤」の字義は「魚の卵」である。微小な魚の卵が想像を絶する巨大な魚の名に転化されたこと自体が、すでに常識の逆転にほかならない。

この魚はさらに巨鳥に変身する。水中の魚から空中の鳥への変化が、またしても常識をゆさぶる。巨鳥は幾千里もの羽翼を勢いよく羽ばたいて飛びたつ。「是の鳥や、海運けば将に南の冥に徙らんとす」。海が「運く」とは、東シナ海の夏の季節風による海潮のうねりをいう。

鵬は九万里の遥かな高みに舞い上がり、そこから地上を見下ろす。地上から仰ぐ「天の蒼蒼たる」色は、「其の下を視るや、亦た是くの若くならんのみ」。鵬が天上から見る地上のありさまも、また青々としているのだろうなあ。

私たちは宇宙から送られてくる映像で、すでに「青い地球」を知っている。しかし、遥かな古代にあって、想像力でそれを脳裏に描くのは、やはり常識を超える思考力の所産というほかはない。

無何有の郷

『荘子』には、荘子(荘周)の論敵でもあり親友でもあった恵子(恵施、前三七〇頃〜三一〇頃)との問答を通して展開される章が少なくない。次に紹介するのは、逍遥遊篇末尾の一章。

恵子が荘子に質問した。「吾に大樹有り。人は之を樗と謂う。其の大本は擁腫にして繩墨に中らず、其の小枝は巻曲して規矩に中らず。之を塗に立つるも、匠者は顧みず」。

恵子がいうには、「わが家に樗と呼ばれる大木があるが、その幹はこぶだらけで墨繩もあてられず、小枝は曲がりくねって、物差しもあてられない。道ばたに立っているのに、大工も知らぬ顔だ」。要するにまるで役立たずの無用の大木ということ。

それに対して、荘子が答える。「イタチは身が軽く、あちこちを軽々と飛び跳ね、高いも低いもへっちゃらだが、その結果としてワナや網にかかって命を落とす。つまりイタチの長所がかえってその命を縮めるもとになる」。

そして、「今　子に大樹有りて、其の用無きを患う。何ぞ之を無何有の郷、広莫の野に樹え、彷徨乎として其の側に無為にし、逍遥乎として其の下に寝臥せざる。斤斧に夭られず、物の害する者無し。用う可き所無きも、安んぞ困苦する所あらんや」。

「君はうちの大木は役立たずだとこぼしているが、なぜその木を『無何有の郷』『広莫の野』、すなわち何一つない村里や果てもない曠野に植えて、ゆったりとそのかたわらに憩い、のびのびとその下に寝そべらないんだ。無用の大木は斬り倒される恐れもないから、役立たずを気に病むことも

ないんだよ」。

『荘子』にしばしば描かれる無用の大樹は、「散木」と称される。その散木の効用が、いわゆる「無用の用」である。

私は『荘子』をひもといて、この章に至るたびに心安らぐ。この我々の生きる社会では、何かにつけて目先の有用性が求められる。もし人間が真の進歩を目ざすなら、もっと大きな視野の中での有用性をこそ追求すべきだろうに。

『荘子』はまたいっている。「大知は閑閑たり、小知は間間たり」(斉物論篇)と。大きな知恵はゆったりとしているが、小さな知恵はせせこましい。

車輪作りのコツ

『荘子』にはさまざまな技芸の達人が登場する。天道篇の輪扁の話はことに有名である。「輪扁」とは、車輪作りの職人で、名を「扁」という人物のこと。

斉の桓公が広間で書を読んでいると、下で木を削って車輪を作っていた輪扁が問いかけた。「お尋ねしますが、殿さまの読んでいなさるものには、どんなことが書かれているのでしょうか」。

桓公「聖人のことばだ」

輪扁「聖人というのは生きているんですか」

桓公「いや、とっくに亡くなっている」

輪扁「じゃあ、殿さまの読んでいなさるのは、昔の人の残りカスってわけですね」

それを聞いて桓公はムッとして気色ばんだ。「車大工ふぜいが何をいうか。申し開きができればよし、さもなければ命はないぞ」。だが、輪扁は少しもひるまず、車輪作りのことをたとえに、理路整然と自説を述べた。

「輪を斲るに、徐ろにすれば則ち甘にして固からず、疾やかにすれば則ち苦にして入らず。徐ろならず疾やかならざるは、之を手に得て、心に応ず。口に言うこと能わず、数のこれを其の間に存する有り。臣以て臣の子に喩す能わず、臣の子も亦た之を臣より受くる能わず」。

車輪を削るのに、ゆっくりやれば、車軸のはめこみが緩くてきっちり締まらないし、急ぎすぎるとはめこみがきつくて入りにくくなります。遅くも速くもない手加減は、この手で知って、心で会得するものです。口に出していえないようなコツがそこにあるんですねえ。そいつは自分の息子にだって教えられないし、息子だってわたしから教わるわけにはいかないんです。

車輪作りの秘伝は、理屈では説明できない。ただ自分の手だけがそれを知っている。だから、古典に書かれている聖人の言は、実践の裏づけのないただの空論に過ぎないことになる。この輪扁の主張には、常に聖人の言を基準とする儒家への反発があり、言語は万能ではないという強い主張が

ある。

人間は言語というコミュニケーションの手段を発達させたことによって、この地上に君臨している。しかし、言語には意外な弱点のあることを輪扁は指摘している。

荘周、夢に胡蝶となる

『荘子』に数多い寓話の中でも、斉物論篇の荘周が夢に胡蝶となった話は特によく知られる。

「昔者、荘周　夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩しみて志に適えるかな。周たるを知らざるなり。俄然として覚むれば、則ち蘧蘧然として周なり」。

いつか、荘周は夢の中でチョウになっていた。「栩栩然」は、ひらひらと舞うさま。そんなチョウの身に気持よく満足しきって、自分が荘周であることも忘れていた。が、やがてふと目が覚めれば、まぎれもない荘周である。「蘧蘧然」は、形のはっきりしているさまで、目覚めのありさまをいう。

「周の夢に胡蝶と為れるか、胡蝶の夢に周と為れるかを知らず。周と胡蝶とは則ち必ず分有り。此を物化と謂う」。

はて、これは荘周が夢でチョウになっていたのか、それともチョウが夢で荘周になっていたのか。

荘周とチョウには必ずや区別があるはずだ。これこそ「物化」、すなわち万物の変化というものだ。

荘周とチョウは現実には確かに別の存在である。しかし、夢を通して二つの存在は自由に行き来している。このように異種の境界を融通無碍に変化しあうのが「物化」であり、現実と夢とが一つに溶けあった世界が現出している。

常識的な視座を転換することによって、ものごとの別の側面が見えてくることは、秋水篇の荘子と恵子(恵施)との問答にも説かれている。

荘周と恵子が川のほとりを散歩しているとき、荘子がいった。「ハヤがのびのびと泳ぎまわっている、あれこそ魚の楽しみだね」。すると、恵子が反発して、「君は魚でもないのに、どうして魚の楽しみが分かるのだ」。荘子「君はぼくじゃないのに、どうしてぼくに魚の楽しみが分からないと分かるのかね」。

この問答では、荘周と恵子と魚との間に三種の視座の転換がある。常識的な論理では、恵子の主張に分があるかに見えるが、その論理が再逆転されることによって、荘子が「魚の楽しみ」を知っている可能性は依然として保たれている。

視座の転換という思考のあり方を『荘子』から教えられる。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com